

令和6年度(2024年度)志賀中学校学校評価書							
大項目	中項目	小項目	自己評価 現 況		学校関係者評価 意見・提言等		今後の学校改善に向けて
			評価項目	評価内容	評価項目	評価内容	
(協 同 学 的 び な 合 学 い び)	確かな学力	基礎学力定着のための指導方法の工夫と改善	A	〇校内研究では昨年度に引き続き3つのチャレンジ目標を設定し、年間3回の研究会を開催することができた。目標の1つに「タブレットを有効に活用し、“生徒の学びの可能性”を広げる」というテーマを設定し、授業での利用の定着、効果的な利用方法の共有に取り組むことができた。 〇年間を通して毎週水曜日に“eライブラリチャレンジデー”を設定し、タブレットを持ち帰り家庭学習に取り組む活動を継続して実施した。eライブラリ(学習アプリ)を活用し、基礎・基本を定着させる活動を推し進めることができた。 ●eライブラリチャレンジデーの設定により家庭学習の機会が増えたものの、取り組み方については生徒の自主性に任せている部分が多く、課題の設定などさらなる取り組みの工夫が必要である。 ●学習をストレスに感じる生徒に対するアプローチが難しい。	B	〇タブレット(ICT機器)の活用については、少人数グループで対話が生まれるような授業づくりを心がけてほしい。生徒とタブレットが1対1にならないような工夫が必要である。 〇多様な家庭状況があるなか、家庭学習の取り組みを一律に進めていくことは難しいのではないかと。 〇世界に目を向けると、さまざまな社会情勢により権利が奪われている子どもが少なくない。そのような状況の中、子どもたちには「学べる幸せ」を感じてほしい。	〇タブレット端末(iPad)をはじめとするICT機器のさらなる活用や、授業の形態や学習の場面に合わせた選択ができるよう、情報共有や職員研修を充実させる。 〇“eライブラリチャレンジデー”の取り組みでは、課題の内容や設定方法を工夫することで、タブレット端末(iPad)を活用した基礎・基本の定着を目指す。
		家庭学習の充実	B				
		基礎・基本の定着のためのICT機器の活用	B				
主体的・対話的で深い学び	主体的・対話的で深い学び	言語活動の充実	A	〇校内研究のチャレンジ目標の1つとして「コの字型・4人グループの活動を軸に、“生徒のつながり・対話”を育む」というテーマを設定し、効果的な学習形態の選択・実践について深めることができた。 〇授業の内容に合わせて学習の形態(一斉、少人数グループ、個人)を変えることがあたりまえになっている。少人数のグループによる学習活動では、自分の考えをアウトプットすることが知識の定着につながっている。 〇校内研究の3つ目のチャレンジ目標として「授業デザイン(ジャンプの課題)を工夫し、“主体的・対話的な学び”を生む」というテーマを設定し、深い学びにつながる効果的な発問について研究することができた。	A	〇授業の受け手である生徒が授業をどのように受け止めているか、生徒の代表と一緒に考える機会を持つてはどうか。そういった時間を確保することは難しいと思うが、授業と一緒につくるという新鮮な活動を通して、さらに主体的に取り組むことが期待できるのではないか。 〇4人グループでの活動で生徒の相互理解が深まり、話しやすい雰囲気の中でそれぞれが前向きに取り組めているようすがうかがえた。	〇授業の内容に合わせて学習形態(一斉、コの字型、少人数グループ、個人)を選択し、生徒のつながり・対話を育む学習活動を展開できるように努める。 〇少人数グループでの学習活動を中心とし、より主体的に取り組むことができる授業を生徒とともにつくる。
		支持的風土を育てる学級・学年集団づくりの実践	A				
		協同する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善	A				
体験活動	体験活動	主体的・対話的で深い学びを追求する授業研究や研修会	A	〇校内研究の3つ目のチャレンジ目標として「授業デザイン(ジャンプの課題)を工夫し、“主体的・対話的な学び”を生む」というテーマを設定し、深い学びにつながる効果的な発問について研究することができた。	A	〇授業の受け手である生徒が授業をどのように受け止めているか、生徒の代表と一緒に考える機会を持つてはどうか。そういった時間を確保することは難しいと思うが、授業と一緒につくるという新鮮な活動を通して、さらに主体的に取り組むことが期待できるのではないか。 〇4人グループでの活動で生徒の相互理解が深まり、話しやすい雰囲気の中でそれぞれが前向きに取り組めているようすがうかがえた。	〇授業の内容に合わせて学習形態(一斉、コの字型、少人数グループ、個人)を選択し、生徒のつながり・対話を育む学習活動を展開できるように努める。 〇少人数グループでの学習活動を中心とし、より主体的に取り組むことができる授業を生徒とともにつくる。
		各種体験活動の積極的な実施	A				
		活動後の発表会等学習のまとめ	A				
道徳教育の充実	道徳教育の充実	体験学習の評価	A	〇体験的な活動を通して、説明だけでは伝わらない部分まで理解を深めさせることができた。仲間と協力して体験することが、集団の成長につながった。 〇校外学習の事後学習に班で協力して取り組み、ポスターやスライド作りにいきいきとした表情で取り組む生徒が多く見られた。 ●総合的な学習をより充実させるため、調べ学習や体験的な活動に、さらに取り組ませたい。	A	〇働き方改革で行事そのものや内容が精選されている。現場ではさまざまな検討・工夫がなされていると思うが、教員を増員しないで質を維持することは本当に難しいと思う。	〇校外学習や修学旅行、職場体験学習などが系統的な取り組みとなるよう、行事検討委員会で3年間を見通した計画を立て実行に移す。 〇コロナ禍の経験を経てスクラップ＆ビルドされた行事について内容の検証を行い、さらにブラッシュアップされた形を目指す。
		生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳の実践力を育てる活動の実施	A				
		道徳科の授業・評価に関する研究や資料の開発・整備・交流	A				
体力づくり	体力づくり	保護者等への道徳科の授業公開	B	〇保護者参観を道徳の授業(情報モラル)で実施できた。家庭で道徳についての話題がでるきっかけを作ることができた。 〇担任だけでなく、学年の教員全員が道徳の授業に関わったことで、授業内容についての意見交流ができたり、各クラスの実態を知ることができたりした。 〇ひとつの教材を用いて複数のクラスで授業を行うことで、その教材について深く研究することができた。 ●学習内容や授業展開、ポイントについて話し合える機会が持てるとよい。 ●各クラスでDVDを利用できる視聴覚機器の設備がほしい。	A	〇道徳教育を行う上で、どのような内容をテーマにするかが大事だと思う。いじめについてのことや、環境についてなど、子どもたちが自分事として考えられるようなものを選んでほしい。 〇道徳の授業などで自分の考えを伝えあうことで、人とのつながりが深まったり、自己肯定感が高まったりすると思う。 〇専門家による講義などを行うことで、自己理解を深めるような授業を行ってほしい。	〇学校生活や行事、生徒の状況に合わせて、自分事として考える機会を持てるテーマを設定する。 〇授業内容や展開のポイントについて、教員間で共有する機会をもつ。 〇今年度と同様に、保護者に向けた道徳の授業参観を実施する。
		たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善	A				
		体力づくりを推進する運動実技	A				
(計 画 的 ・ 組 織 的 ・ 画 的)	指導体制・指導方法の工夫改善	体を動かす気持ちよさを体験させ、進んでからだを動かそうとする意欲の育成	B	〇お昼の放送では、その日の献立にまつわる地域や行事、栄養に関する情報が伝えられ、食に興味を持ちやすい環境が整えられている。保護者にも連絡アプリで配信することができている。 〇栄養面を意識して給食をとっている生徒、配膳された自分の分を完食する生徒が多い。 〇体育委員会が中心となり、帰りの会で体力をつけるための活動(もも上げ運動)を展開している。 ●お昼の放送を聞く態度や、帰りの会での運動に取り組む姿勢について、周知と啓発をさらに進める必要がある。	A	〇献立について、放送で伝えているのは良い。 〇睡眠について、不足している原因や改善の方法を考えさせることで、体力づくりににも良い影響が出ると思う。 〇中学生に体力づくりを意識させるのは難しいのではないかと。	〇お昼の放送を活用した食育、健康指導に継続して取り組む。 〇委員会活動やほけんだよりを活用して、睡眠の質向上や体力づくりを啓発する。
		学力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善	A				
		教職員の指導力及び組織的な教育力の向上	A				
計画(指導的・組織的・画的)	指導体制・指導方法の工夫改善	ICT活用による校務の効率化と教育活動の質の改善	B	〇継続した内容での校内研究に取り組むことで指導体制・指導方法の工夫改善に努め、中堅教員が中心となって若手教員の見本となることで、組織的な教育力の向上を目指してきた。 〇会議資料のデジタル化により、教員間で即時に周知、共有、確認ができている。 〇AI採点ソフトの導入により、教科によって差はあるが、テストの採点時間が大幅に短縮された。 〇校務支援ソフトや保護者連絡アプリの積極的な活用により、校務の効率化を推し進めることができた。 ●校務分掌の責任者に任せてしまい、担当でありながら仕事が偏っている。	A	〇コロナ禍で志賀中学校の良い取り組みが止まっていたことを心配していたが、最近取り組みが復活してきたようで安心している。学び合いなどの指導体制を継続してほしい。 〇主体的に学ぶ、自分で考え・解決する学習方法が、社会に出てからも役立つと思う。 〇働き方改革で先生たちが持ち帰って仕事をしていては意味がない。難しいとは思いますが、採点ソフトの導入など工夫できるところはさらに取り入れてもらいたい。	〇校内研究ではこれまでに蓄積してきたノウハウを生かし、新しい視点も入れつつ、継続した内容での取り組みを進める。 〇校務支援ソフトや保護者連絡アプリ、採点ソフトなどを最大限に活用し、校務の効率化と働き方改革につなげる。
		働き方改革の取組と教育活動の質の改善	A				
		働き方改革の取組と教育活動の質の改善	A				
育ちと学びを支える連携	家庭・地域との連携	保護者の子育てに対する積極的な支援	B	〇防犯・薬物乱用防止といった啓発活動や職場体験学習など、様々な場面で多くの協力・支援をいただいていることを実感している。 〇今年度は2回の避難訓練を実施した。そのうち1回は事前に周知することなく抜き打ちで、自分の教室からではなく授業で使っている場所からの訓練を実施したが、混乱することなく整然と避難することができた。避難経路の確認や避難の仕方など生徒の訓練だけでなく、教員の役割確認や通報・消火訓練なども合わせて実施する事ができた。 〇学期に1回の授業参観をはじめ、部活保護者会(見学)や志賀中祭(合唱・体育祭)など、参観の機会を大幅に増やすことができた。	B	〇避難訓練を事前の周知なしで実施するなど、実際の災害を想定した訓練ができていて良かった。 〇志賀中祭(合唱コンクール・体育祭)などの学校行事は不登校傾向の生徒がいる保護者は行きにくいので、その親に対する支援ができると良い。	〇地震・火事だけでなく不審者の侵入を想定したものや、昼休みなど授業以外の時間帯での避難訓練を計画、実施する。 〇教育相談担当と担任が連携しながら、生徒・保護者に対する計画的・継続的な支援を実施する。
		保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会、研修会の実施、地域人材の活用	A				
		防災教育の推進と安心・安全な学校づくり	A				
育ちと学びを支える連携	保幼小中の連携	子どもの校種間交流や教員の出前授業	B	〇校区研では年間3回の部会別研修と、夏期休業中の合同研修会を実施することができた。 〇3年生では家庭科の授業の一環として幼稚園での「ふれあい体験学習」に、2年生では職場体験学習で地域の保育園・幼稚園での体験に、それぞれ取り組むことができた。 〇今年度も、次年度入学予定の小学校6年生を対象に、出前授業を実施することができた。 〇保幼小中の保育・教務主任が集まり、次年度の行事予定や総合的な学習の時間の取り組みについての共有、カリキュラムマネジメントに取り組むことができた。 ●保幼小中で、授業公開や交流会ができるとよい。	B	〇保幼小中連携については、生徒がより安心して中学校に入学できるよう、これからも生徒の情報交換を含めた連携をより深めていってほしい。	〇次年度入学予定の小学6年生を対象とした出前授業や、入学した中学1年生の授業参観・連絡会を計画的に実施し、小中連携を推し進める。 〇職場体験学習や教科の学習を通して、地域の保育園・幼稚園との交流に引き続き取り組む。 〇校区研を軸にした校種間の連携・交流を深め、学区の児童・生徒の実態に即した研修を計画、実施する。
		校種間の授業公開や合同研修会	B				
		保幼小中の接続期の教育課程の編成など校種間のカリキュラム研究	B				
組織的体制の充実	生徒指導体制の充実	個別の教育支援計画及び個別指導計画の作成と活用	A	〇組織的できめ細やかな生徒指導体制が確立している。複数で情報共有し、迅速な対応を心がけることができている。 〇不登校生徒(学校に来にくい生徒含)が多く個々のケースへの対応が難しいが、レインボー(校内適応教室)や教育支援ルーム「中学校ウイング和邇」、民間の支援団体などを活用しながら学力保障に取り組んでいる。 ●生徒指導が後手後手にならないよう、タイムリーな情報共有ができる手立てを工夫する必要がある。	A	〇社会情勢の変化に伴って家庭環境も変化しており、不登校生徒が今後も増加することが懸念される。より一層の支援の充実が必要である。	〇引き続き、積極的な情報共有に努め、組織的な生徒指導体制のもと迅速な対応を心がける。 〇教育支援センターとの連携を密にとり、レインボー(校内適応教室)や教育支援ルーム「中学校ウイング和邇」、民間の支援団体などを活用して、不登校生徒の支援の選択肢を広げていく。
		生徒指導・教育相談体制の確立と組織的な推進	A				
		家庭・地域・関係機関との連携による指導	A				
組織的体制の充実	特別支援教育の充実	個別の教育支援計画及び個別指導計画の作成と活用	B	〇個別の支援計画を作成し、保護者との相談を進めることができている。また、関係機関と連携して個々のケースについて協議し、対応にあたっている。学年部会では支援計画がある生徒についての情報交換がなされている。 〇巡回相談で外部の専門性のある先生にアドバイスをいただけたのでよかった。 〇校内研修では「ユニバーサルデザインの授業」について、外部講師を招聘して研修を行うことができた。これまでの自分の授業を振り返りるきっかけとなった。 ●個別の支援計画の書き方や活用法についての共通理解、定期的な状況報告ができるとよい。	B	〇子どもの現状を保護者が理解するとともに、学校は生徒だけでなく必要に応じて保護者への支援を行うことが重要である。	〇SSWやSCなどの専門家に意見を仰ぎつつ、関係機関との連携を取りながら、個別の支援計画を効果的に活用できるように努める。 〇特別支援教育コーディネーターと担任が連携しながら、生徒・保護者に対する計画的・継続的な支援を実施する。 〇通級指導教室を一層効果的に活用できるように努める。
		組織的・計画的な特別支援教育体制	A				
		生徒理解を深めるための研修体制(巡回訪問を含む)	B				
学校満足度	生徒の学校満足度		A	〇「学校生活は楽しく満足したものか」との質問に対して生徒の95%が、「お子さんは学校に行くのを楽しみにしていますか」との質問に対して保護者の77%が「そう思う」「まあまあそう思う」と回答した。	A	〇例年、生徒の学校満足度は評価Aをキープすることができている。生徒と教師の信頼関係を大切に、今後も継続できるようにしてほしい。また、否定的な回答があることにもしっかり目を向けることが必要である。	〇生徒一人ひとりを見つめる視点を大切にし、引き続き高い学校満足度を維持できるようにする。

*各種アンケートにおいて「かなりできている」「ほぼできている」が概ね80%以上がA、60%以上をBとする。